

「<ゆとろぎ>の時間旅行」阿部圭子

科研プロジェクトのメンバーと昼食をとっている時のことだった。一人が「マイヨフは大丈夫かな・・・？」と小さくつぶやいた。「マイヨフは？セブハの皆はどうしているだろう？」、この問いはこの数か月間、仲間の誰もが心の奥底にもやもやと引っかかってはいても言葉に出せないでいたことであった。

マイヨフとはリビアのセブハ(Sebha)大学の先生のこと。私達は2010年3月に科研プロジェクトの一環としてSebha大学で開催されたワークショップに招待された。今でこそカダフィ政権崩壊で注目されているリビアであるが、当時私の周りで「リビア」の知識を持っている人は殆どいなかった。リビアと言えば、カダフィ大佐が恐怖政治をしている恐ろしい国。人々はその圧制を受けてどれだけビリビリと暮らしているのか？しかし、実際に行ってみると、言い知れぬ平穩でゆったりとした日常があった。



科研メンバーとサハラ砂漠にて  
(左から二人目がマイヨフ)

マイヨフに初めて会ったのは2007年3月の東京であった。科研プロジェクトのランチにリビアからの参加者のマイヨフも誘って欲しいと依頼を受けた。初対面のマイヨフは浅黒い肌に白い歯が印象的な上品な青年研究者であったが、その振る舞いはどこか悠然としていた。ランチの食べ物に何が含まれているのかを一々確認してから食べるので、ひどく時間がかかった。そしてランチ代を支払った私に対して、それは奢られるのが当たり前かのような態度で少々戸惑いを覚えた。しかし、その後リビアに行った時にその謎は解けた。リビアでは、招待された客は、堂々と振舞うことが、招待側に対する礼儀とされているのだ。それまでの私の異文化体験は西洋対東洋の対比が殆どであった。しかしながら、マイヨフと出会って、それらの二項対立には見られない、これまでに経験したことのない文化やイスラーム社会の生活態度を垣間見ることができた。

リビアの旅で印象的だったのは、サハラ砂漠と地中海の深い青色の海と人々の屈託のない明るい笑顔。そして何よりも驚かされたのは約束に縛られない、ゆったりとした時間の流れである。

E.T.Hallは、スケジュールを重視し、物事を一つずつ片付けていくような時間の使い方をモノクロニックな時間(Mタイム)、また計画やスケジュールよりもその時々を重視し、複数の事柄が同時進行するような時間の使い方をポリクロニックな時間(Pタイム)と呼んだ。リビアのイスラーム社会はまさにこのPタイムで進んでいく社会である。

イスラーム研究者の片倉ともこによればイスラームの世界では時間が流れてしまったら、もうその時間に戻ることはできないため、昨日のお礼やお悔やみを言うことが無いそうだ。「時」は、一瞬一瞬が神の創造にかかっているので過去・

現在・未来は因果関係によって繋がっていない。イスラーム社会では常に「現在」だけが存在し、過去に決められたことも、その時(現在)になってみなければわからないと考える。西洋的思考方からするとそれは「約束が違う」、「信頼がおけない」と映るかもしれないが、イスラーム社会では「人間は変わるもの」が前提で、「変わらない」ということに価値を置いていない。むしろ歳月と共にうつろっていくことの方が自然とされている。

さらに片倉は「ショグル」、「ラアブ」、「ラーハ」の3つのワクト(時間)に分けられているイスラームの生活時間について説明している。「ショグル」は仕事や労働の時間のことで、生活のために仕方無く仕事をするが、決して重要視していない。それというも過酷な自然状況の中では、労働に価値を置くと、心身共に過度に疲労してしまうからである。2つ目の「ラアブ」は遊びの時間のことで、労働と同様に重要視していない。遊びは子供がすることで一人前の大人がすることではなく、むしろ大人の威厳をおとすことと考える。最も重要なのは3つ目の「ラーハ」で、「幸せ」や「憩い」という意味で、片倉は「ゆとり」と「くつろぎ」を併せて「ゆとろぎ」という造語で表現している。労働をしたから休むとか、疲れたから休むのではなく、ラーハの時間を持つために労働すると考える。その内容は「家族とともに過ごす」、「人を訪問する」、「友人とおしゃべりする」、「神に祈りを捧げる」、「眠る」、「旅をする」、「勉強する」、「知識を得る」、「詩をうたいあげる」、「瞑想する」、「ぼんやりする」、「寝転がる」などが含まれ、このラーハの時間をたくさん持つことが人間らしい、良い生き方とされている。

そして今回のリビアの旅で私はまさにこの「Pタイム」と「ラーハのワクト」を体感したのである。それは「例えば」として取り上げるには、あまりにも多すぎる経験であった。無理もない、このことはリビアの生活を形成する根源的理念ともいうべきもので、リビアにいる限り逃れられないことだ。しかしそうはいっても、いくつか印象に残った「例えば」を挙げてみよう。

まず最初の「例えば」は、ワークショップにプログラムが表示されていないことである。事前に綿密に発表のタイトルや順番などを確認したにも関わらずである。その理由は発表の順番が時によって変更されるからということだった。

次は、ランチやその他の計画は常に状況に応じて変化することだ。発表が盛り上がりれば、発表時間は延び、食事の時間やお茶の時間が遅れたりするのは当たり前。私の発表は1日目の午後の予定と言われていたが、突然、マイヨフから午前中に発表すると言われて戸惑った。今の話の流れではそうすることがベストだという。さらに発表の内容にアラブの言語パターンについても触れるようにとその場で言われた。

そしてマイヨフとの予定は随時変化する。その日のスケジュールも瞬時に変わるのである。突然、学長に挨拶に行くことになったり、その後、もう会えないとされていた学長に再度、会いに行くことになったりして、それは砂漠の砂模様様が刻一刻と変化するのも似て、どうとでも変化していくのである。そのために携帯電話は常に手放せない。何故ならその瞬間、その瞬間で状況が変わるからである。



ワークショップ

マイヨフが壇上で自分の研究を発表している最中にも携帯電話がかかってきたのだが、慌てることなく平然と応答し、誰もそれを気にも留めていない様子であった。また他の人の発表の間にも聴衆の携帯電話には始終、電話がかかってきていて、会場のあちこちで携帯に回答している人の声が聞こえ、時には発表が良く聞こえないほどであった。

また今回はマイヨフの母親と奥さんの体調が悪いことから、自宅へ招待はできないということだった。その代りにマイヨフは4人の子供達を連れてわざわざホテルを訪ねてくれた。記念に、みんなで写真を撮ったりしてかなり時間がたった頃、急にマイヨフがみんなを自宅に連れて行くと言い出した。夜も遅い時間にも関わらず突然の自宅訪問となった。「ラーハ」のワクトを最も体感したのは、サハラ砂漠と農場での宴であった。それが私の旅のハイライトとなった。

サハラ砂漠へはセブハから車を飛ばして1時間くらいの休憩所で朝食を摂り、各自2mほどのターバン用の布を購入し、砂漠ツアーの身支度を整えた。車をランドクルーザーに乗り換え、いよいよサハラ砂漠へ突入していった。道無き砂漠をドライバーは何を目印に進んでいたのか未だに不明だが、遊園地のジェット・コースターさながらの縦揺れの中を一路、オアシスを目指した。オアシスの池の水は高い塩分濃度のため水中では体がプカプカ浮かんでしまうのだが、その池での水泳も体験した。さらに水から上がるとTシャツは塩で固まってズッシリ重いほどであった。オアシスの前にそびえ立つ丘の上まで登ったり、ベドウィン族の手作り品を売る土産物屋に行ったりと忙しく動き回っているのは日本人ばかりで、リビアの人々は屋根のある日陰の下で、持参したお弁当を食べる以外は、横になって昼寝をしたり、お喋りをするなど、日本人からするとダラダラしているように見える「ラーハ」の時間を満喫していた。

もう一つのハイライトはマイヨフの持つ農場での夜の宴であった。農場は

小規模の動物園のようにいろいろな家畜が檻に入れられていて、それを見て廻っている間に仔羊2頭が私達のために料理され、銀のお盆に乗せられていた。大きな絨毯が野外に敷き詰められ、その上に靴を脱いで座り、宴は始まった。戒律上お酒は飲めないのです、チャイ(お茶)で乾杯し、食事を食べながら、交互に歌を歌い、それに合わせて踊るのである。すっかり涼しくなった野外で、時間を気にすることも無く、お酒の代わりにチャイの盃を幾度となく交わし、水タバコをふかして過ごす時間は何とも言えぬ、ぜいたくな一時であった。



このように私達は、日本では到底体験できないイスラームの生活を体感した。ある時は戸惑い、ある時は不安になり、またある時には、これが現代の日本人には失われた本来の人間の姿だと実感したのである。

こうして、リビアの旅はいよいよ最終日となる。最終日は朝の5時にホテルのロビーに集合となった。飛行機に乗る人間は全員が日本人で、その時に交わされた会話は「朝5時はリビア・タイム？日本タイム？」と尋ねた質問に誰かが「日本タイム」と答えた。翌朝5時きっかりに部屋の扉を開けた私の耳には同時に全員の部屋の扉が開く音が聞こえた。その音で、「ゆとろぎの時間」が終わったことを実感した。さあ、いよいよ日本へ帰国だ。

片倉ともこ 1991年『イスラームの日常世界』岩波書店

ホール、E.T. 1970年『かくれた次元』日高敏隆、佐野信行訳(みすず書房)[Hall, E.T. The Hidden Dimension. NY: Doubleday and Company, 1966]

■国際学部報「はなみずき(電子版)」第10号(2011年10月)■